

コラージュからみた乳幼児の発達の基礎研究

渡辺朋子¹, 西村喜文²

(¹長崎県スクールアドバイザー, ²西九州大学)

(平成17年12月8日受理)

A Basic Research of the Development of the Infancy and Early Childhood Through Collage Expression

Tomoko WATANABE¹ and Yoshifumi NISHIMURA²

(¹ *School Adviser of Nagasaki Prefecture*, ² *Graduate School of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University*)

(Accepted December 8, 2005)

Abstract

This report examined the development-feature of the collage expression of 1-year-old children to 6-year-old children from formal analysis and contents analysis.

Consequently, ① the girls had more sections and a significant difference was seen especially among 3-year-old children. ② Sticking in a pile and overflow decreased with the increase in age. ③ A significant difference in the ages was seen in the use of the character. The 2-year-old children used the character most and the use of the character decreased with age after that age. ④ A significant difference in the ages was seen in the themes. The works with themes increased with age after the age of three. ⑤ In the rate of appearance of men and women, sexual difference was seen. The boys of four and over stuck many men and the girls of two and over stuck many women. ⑥ As for clippings of hood, more than sixty percent of all the children used them.

In particular, in the 2-year-old children, the significant difference was seen in girls, and in the 6-year-old children, it was seen in boys. ⑦ The boys were using more clipping of vehicle than the girls. Thus the development-meaning that infants collage expression could become development-assessment was suggested.

Key words: collage expression コラージュ表現
infancy and early childhood 乳幼児期
development assessment 発達査定

1. 目 的

日本におけるコラージュ療法 (collage technic) は、1989年に森谷、杉浦によって提案され医療や教育の現場など様々な分野で実践されている。先行研究として下山 (1999) の、ひきこもりの中学生に対して行ったコラージュ療法、服部 (1999) の、青年期の対人恐怖症者 (anthrophobia) に対するコラージュ療法、また西村 (2000) が重症心身障害者に行った臨床研究、岡田 (1999) による統合失調症者 (schizophrenia) への取り組み、匹田 (1999) らが行った末期癌患者へのアプローチなどの報告がある。

このようにいくつかの意義あるコラージュ療法は、杉浦 (1993) の3歳児以降の発達の研究があるものの、乳幼児児への取り組みは報告されていない。乳幼児児においても発達的アセスメントが必要であり発達の意義は大きい。

本研究では乳幼児期のコラージュの特徴を明らかにするため、健常乳幼児 (1歳～6歳) の作成したコラージュ作品を、①形式分析 ②内容分析をし、乳幼児期における年齢ごとのコラージュの特徴を明らかにする。形式分析では切片数、余白、貼り方、色彩などにおいて発達的な特徴を明らかにする。内容分析では発達による変化に加え、動物、植物、乗り物、人間男女の有無などから発達の特徴を把握し、年齢および性差による特徴を明らかにする。

2. 方 法

(1) 調査対象

N市の公立保育所5ヶ所での1歳児から6歳児までの男児189名と女児185名 計374名 (表1)

表1 調査対象の実数と内訳

年齢 性	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計
	男 児	26名	25名	26名	30名	43名	39名
女 児	29名	38名	27名	38名	33名	20名	185名
計	55名	63名	53名	68名	76名	59名	374名

(2) 調査期間

平成15年8月～平成16年3月

(3) 調査手続きと方法

実施方法は、コラージュボックス法で行った。切り抜き用の雑誌は、幼児用雑誌・通販カタログ・女性雑誌・機内誌・新聞広告を利用し、切り抜きには偏りがないよ

う配慮する。1つのボックス内には切り抜きを約700枚用意し、ボックスは6箱用意した (表2)。

表2 コラージュ材料の内訳

内 容	枚 数	内 容	枚 数
自然・風景	35	食 べ 物	150
人 間	120	乗 り 物	25
動 物	20	物 体	200
植 物	30	抽 象	25
建 物	25	漫 画	40
室 内	10	文 字	20

制作状況は1歳から3歳児まではコラージュ経験のある保育士に補助をしてもらって行った。実施場所は保育所によって異なる。保育室、遊戯室、絵本の部屋、職員控え室で行うが、他の子どもを戸外に移動させるなどして、制作に集中できるような環境設定をした (表3)。

表3 年齢ごとのコラージュ制作手続き

年 齢	制 作 状 況	実 施 場 所	方 法
1歳児	1対1 (筆者) 保育士補助	保育室等	机の上に切り抜きを置き選ばせる。糊付けはこちらで行う。
2歳児	2対1 (筆者) 保育士補助	保育室等	コラージュボックス法
3歳児	3対1 (筆者) 保育士補助	保育室等	コラージュボックス法
4歳児	4対1 (筆者)	保育室等	コラージュボックス法
5歳児	4対1 (筆者)	保育室等	コラージュボックス法
6歳児	4対1 (筆者)	保育室等	コラージュボックス法

1歳児はボックスの中から切り抜きを選ぶことが難しいため、机の上に約60枚程度の切り抜きをなるべく重ならないように広げ選ばせた。さらに選んだ切り抜きに糊をつけて渡し、好きな場所に貼らせた。2歳児以上では全て自分たちで行い、糊貼りはでんぶん糊を使用した。

(4) 分析方法およびレコードシート構成

結果の処理については杉浦 (1994) の先行研究を基準にして分析を行った。その中に独自の項目 (人間男性・人間女性・漫画アニメ・漫画その他) を入れてサンプルごとに以下のような各項目をレコードシートとした。1人について作品が複数ある場合は1枚目のみをサンプル数とした。尚、統合性、中心性、テーマの有無に関しては信頼性を高めるため臨床心理学を専攻している大学院生3名と協力して平均値を算出した。

〈形式分析の項目内容〉

・切片数・・・切り抜きの数はいくつか

- ・余白の有無・・・台紙に余白があるかどうか全面切り抜きで貼られた作品は余白無しと判定した
- ・余白の分量・・・台紙のどのくらいの分量が余白であるか。余白の分量は作品にトレーシングペーパーを置き余白を写し取った後、作品と同じ大きさの用紙を100マスに区切ったものの上に貼り付けて全体における割合を計算した
- ・はみ出しの有無・・・切り抜きが台紙からはみ出しているかどうか
- ・重ね貼りの有無・・・切り抜きが重ねて貼ってあるかどうか（端だけ重ねてあっても有りとして判定した）
- ・文字の有無・・・数字、漢字、ひらがな、カタカナ、英字の中でどれか1つでも使用されたかどうか
- ・色彩数・・・色彩が何色使用されたか 杉浦の研究では3つに分けられているが、さらに詳しい結果を得るために非常に少ない(1~2色)、少ない(3~5色)、普通(6~8色)、多い(9~11色)、非常に多い(12色以上)の5件法を用いた
- ・色彩の明度・・・作品を見て、1明るい、2中位、3暗いの3件法を用いた
- ・色彩の彩度・・・作品を見て、1淡い、2中位、3濃い3件法を用いた
- ・色彩の色相・・・作品を見て、1暖かい、2中位、3冷たいの3件法を用いた
- ・統合性・・・作品全体としてバランスがとれていると思われる作品には、1(+)の評価、どちらともいえないものには、2(±)、とれていないものには、3(-)の3件法を用いた
- ・中心性・・・制作者が特に好んで貼った切り抜きがあり、その周りに貼られたものがなんらかの影響を受けていると感じたものを中心性がある作品と捉え、その有無を判定した
- ・テーマの有無・・・作品にテーマがあると感じられるかどうかについて

〈内容分析の方法〉

以下の項目を決定し、作品の中にその切り抜きがあるかないかを判定した

- ・自然
- ・人間(全体)・・・杉浦の設定とは異なり、漫画、アニメに関しては別に項目を設けたために省いた
- ・人間(部分)・・・同上
- ・人間(男性)・・・杉浦の設定には無いが、今回性別の獲得時期等を調べるために設定した
- ・人間(女性)・・・同上
- ・動物(全体)・・・漫画、アニメは省いた
- ・動物(部分)・・・同上
- ・植物

- ・建物
- ・室内
- ・食べ物
- ・乗り物
- ・物体・・・小道具類、家具、装飾品、ぬいぐるみ、人形、玩具なども含む
- ・抽象・・・抽象的なイメージが感じられれば有りとした
- ・漫画(アニメ)・・・対象が乳幼児であったため、出現頻度が多いと考えられたことから別に項目を設けた漫画の中にもテレビや漫画のキャラクターに関してはこの項目でその有無を判定した
- ・漫画(その他)・・・漫画アニメ以外のイラストに関してはこの項目で有無を判定した

3. 結 果

(1)形式分析

1) 切片数

表4は性差についてみたものである。全体では男児より女児の方が切り抜き数は多い。女児(14.0枚) > 男児(11.8枚)。女児は3歳児まで年齢と共に切り抜き数が増え、5歳児で増加する。特に3歳児において有意な性差が認められた($t = -2.73, df = 51, p < .01$)。3歳児の女児群は男児群より切片数が多いという結果が得られた。

表4 切片数(性別)の平均値(枚数)

年齢	性	
	男児	女児
1歳児	11.2	10.7
2歳児	12.5	14.1
3歳児	*10.0	*15.7
4歳児	11.4	14.7
5歳児	13.5	15.3
6歳児	11.1	13.0
全体	11.8	14.0

* $p < .05$

2) 余白の有無

台紙を全部埋めてしまい、余白が全くないものは4歳児の1例のみだった。他の年齢群では余白無しは全く出現していない。

3) 余白の分量率

各年齢群における余白の分量率では、年齢との関連性があることがいえた($F = 9.50, df = 5, p < .01$) (表5)。

表5 余白の分量

年齢	平均値 (%)	標準偏差値
1歳児	57.1	18.7
2歳児	44.8	22.0
3歳児	46.7	19.9
4歳児	40.3	19.4
5歳児	37.8	15.2
6歳児	36.0	19.7
全体	43.3	20.2

余白の分量は1歳児で最も多く、3歳児で一度増加するがその後は6歳児まで年齢と共に減少する傾向がうかがえた。

余白分量率の性差はみられなかった。男児(46.0%)>女児(40.8%)。

4) はみ出しの有無

年齢とはみ出しの有無との関係においては関連性が認められた($x^2=20.36$, $df=5$, $p<.01$) (表6)。1歳児から4歳児までは50%以上のはみ出しが見られるが、5歳児以降は30%と極端に減少することがわかった。

表6 はみ出しの有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	27 (49.1)	28 (50.9)
2歳児	24 (38.1)	39 (61.9)
3歳児	26 (49.1)	27 (50.9)
4歳児	33 (48.6)	35 (51.4)
5歳児	52 (69.7)	24 (30.3)
6歳児	41 (69.5)	18 (30.5)
全体	203 (54.3)	171 (45.7)

はみ出しの有無における全体の性差については、有意差はみられなかった。

5) 重ね貼りの有無

年齢と重ね貼りの有無との関係においては関連性が認められた($x^2=12.85$, $df=5$, $p<.05$) (表7)。1, 2歳児は8割以上に重ね貼りがあり、3,4,5歳児では7割に減少し、6歳児では約6割の重ね貼りがある。全体では約7割以上に重ね貼りがみられる。重ね貼りの有無における全体の性差については、有意差はみられなかった。

表7 重ね貼りの有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	8 (14.5)	47 (85.5)
2歳児	9 (14.3)	54 (85.7)
3歳児	13 (24.5)	40 (75.5)
4歳児	20 (29.4)	48 (70.6)
5歳児	21 (27.6)	55 (72.4)
6歳児	22 (37.3)	37 (62.7)
全体	93 (24.9)	281 (75.1)

6) はみ出しと重ね貼り

はみ出しの有無と重ね貼りが両方ある作品の割合をみると年齢と両方の特性の有無とに関連性が認められた($x^2=23.77$, $df=5$, $p<.01$)。1,2歳児では平均値52.1%, 2,3歳児では平均値44.3%, 5,6歳児では平均値25.0%と年齢とともに次第に減少する傾向があった。

表8は、はみ出しの有無と重ね貼りの有無の4つのパターンの割合を示したものである。はみ出しと重ね貼りに画面用紙という枠の中にどのように自己をコントロールし表現するのかということにおいて関連が深いと考えられる。そのため4つのパターンを設定した結果、4群と年齢とに関連性が認められた($x^2=34.68$, $df=15$, $p<.01$)。既述の結果とは逆に「はみ出し無し、重ね貼り無し」の場合、1歳児で9.1%、6歳児で30.5%となり、年齢とともに増加する傾向があることがわかる。

表8 はみ出しの有無と重ね貼りの有無との4パターンの年齢差

年齢	はみ出し有り 重ね貼り有り (%)	はみ出し有り 重ね貼り無し (%)	はみ出し無し 重ね貼り有り (%)	はみ出し無し 重ね貼り無し (%)
1歳児	25(45.5)	3(5.5)	22(40.0)	5(9.1)
2歳児	37(58.7)	2(3.2)	17(27.0)	7(11.1)
3歳児	22(41.5)	5(9.4)	18(34.0)	8(15.1)
4歳児	32(47.1)	3(4.4)	16(23.5)	17(25.0)
5歳児	20(26.3)	4(5.3)	35(46.1)	17(22.4)
6歳児	14(23.7)	4(6.8)	23(39.0)	18(30.5)
全体	150(40.1)	21(5.6)	131(35.0)	72(19.3)

7) 文字の有無

年齢と文字の有無との関係においては関連性が認められた($x^2=20.23$, $df=5$, $p<.01$) (表9)。この項目では数字・漢字・ひらがな・カタカナ・英字のいずれかの使用があったかどうかを調べた。文字の入った切りぬきを使用したかどうかで、意味のある文字を意図的に使用したか否かは問わなかった。文字の使用は2歳児で、

36(57.1%)と最も多い。3歳児までは約4割の使用があり、4歳児以降は減少する。

表9 文字の有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	29 (52.7)	26 (47.3)
2歳児	27 (42.9)	36 (57.1)
3歳児	27 (50.9)	26 (49.1)
4歳児	49 (72.1)	19 (27.9)
5歳児	52 (68.4)	24 (31.6)
6歳児	42 (71.2)	17 (28.8)
全体	226 (60.4)	148 (39.6)

8) 色彩数

使用された色彩の数に関して非常に少ない(1~2色), 少ない(3~5色), 中位(6~8色), 多い(9~11色), 非常に多い(12色以上)の5群に分けたものである。年齢と各群とに関連性が認められた ($\chi^2 = 38.07$, $df = 20$, $p < .01$) (表10)。3,4歳群で色彩の数が多かった。全体の性差に有意差はみられなかった。

表10 色彩数

	非常に少ない (%)	少ない (%)	普通 (%)	多い (%)	非常に多い (%)
1歳児	2(3.6)	8(14.5)	25(45.5)	18(32.7)	2(3.6)
2歳児	0(0.0)	7(11.1)	31(49.2)	20(31.7)	5(7.9)
3歳児	0(0.0)	3(5.7)	16(30.2)	29(54.7)	5(9.4)
4歳児	0(0.0)	7(10.3)	21(30.9)	33(48.5)	7(10.3)
5歳児	0(0.0)	4(5.3)	33(43.4)	31(40.8)	8(10.5)
6歳児	0(0.0)	6(10.2)	34(57.6)	19(32.2)	0(0.0)
全体	2(0.5)	35(9.4)	160(42.8)	150(40.1)	27(7.2)

9) 作品の色彩の明度

作品の明るい色彩,中位,暗い色彩を用いた割合について年齢との関係は認められなかった。

1 0) 作品の色彩の彩度

作品の淡い色彩,中位,濃い色彩の割合について年齢との関係は認められなかった。

1 1) 作品の色彩の色相

作品の暖かい,中位,冷たい色彩の割合について分析したが年齢との関係は認められなかった。

1 2) 統合性

各群と年齢差に関連性が認められた ($\chi^2 = 44.21$, $df = 10$, $p < .01$) (表11)。バランスのとれている作品は年齢と共に増加する。統合性の有無における全体の性差については、有意差はみられなかった。

表11 統合性の有無

	無 (%)	中間 (%)	有 (%)
1歳児	33 (60.0)	14 (25.5)	8 (14.5)
2歳児	30 (47.6)	16 (25.4)	17 (27.0)
3歳児	22 (41.5)	15 (28.3)	16 (30.2)
4歳児	16 (23.5)	26 (38.2)	26 (38.2)
5歳児	17 (22.4)	28 (36.8)	31 (40.8)
6歳児	9 (15.3)	19 (32.2)	31 (52.5)
全体	127 (34.0)	118 (31.6)	129 (34.5)

1 3) 中心性

中心性の有無において年齢との関連性は認められなかった。

(2) 内容分析

1) テーマ性

年齢とテーマの有無に関連性が認められた ($\chi^2 = 42.91$, $df = 5$, $p < .01$) (表12)。テーマの無い作品は年齢と共に減少する。逆にテーマ性のある作品は5歳児で若干減るものの、年齢と共に増加する。全体では約56%がテーマをもって作成しているか、あるいは結果的にテーマが見いだされる作品を作っていることがわかった。

表12 テーマの有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	42(76.4)	13(23.6)
2歳児	37(58.7)	26(41.3)
3歳児	19(35.8)	34(64.2)
4歳児	21(30.9)	47(69.1)
5歳児	27(35.5)	49(64.5)
6歳児	17(28.8)	42(71.2)
全体	163(43.6)	211(56.4)

テーマの有無における全体の性差には、有意差はみられなかった。全体では女兒の方が男児よりもテーマのある作品を作る傾向がみられた。女兒(80.0%) > 男児(77.8%)。

2) 内容

a. 自然

〈自然〉の切り抜きのある割合について年齢との関連性は認められなかった。

b-i. 人間 (全身像)

人間(全身像)では,実際の人間 (アニメや漫画の人物を除く) の全身像の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

b-ii. 人間 (部分)

人間(部分)では,身体の一部の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

b-iii. 人間 (男性)

人間 (男性) の有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

人間男性の有無における全体の性差については、有意差が認められ、男児の方が女児よりも人間(男性)を貼る作品を多く作った($x^2=4.49$, $df=1$, $p<.05$)。男児 58 (30.7%) > 女児 39 (21.1%) (表 13)。

表13 人間男性の有無 (性別)

	無 (%)	有 (%)	計
男児	131(69.3)	58(30.7)	189
女児	146(78.9)	39(21.1)	185
全体	277(74.1)	97(25.9)	374

人間 (男性) の有無における各年齢群の性差については有意差が認められ、4, 5, 6歳の男児は人間男性を多く貼っていた (表 14)。

表14 人間 (男性) の出現率

		無 (%)	有 (%)	計
1 歳児	男児	18(69.2)	8(30.8)	26
	女児	23(79.3)	6(20.7)	29
2 歳児	男児	18(72.0)	7(28.0)	25
	女児	24(63.2)	14(36.8)	38
3 歳児	男児	19(73.1)	7(26.9)	26
	女児	17(63.0)	10(37.0)	27
4 歳児(*)	男児	20(66.7)	10(33.3)	30
	女児	33(86.8)	5(13.2)	38
5 歳児(**)	男児	26(60.5)	17(39.5)	43
	女児	29(87.9)	4(12.1)	33
6 歳児(*)	男児	30(76.9)	9(23.1)	39
	女児	20(100.0)	0(0.0)	20

* $p<.05$ * * $p<.01$

b-iv. 人間 (女性)

年齢と人間 (女性) の有無との関連性が認められた ($x^2=13.61$, $df=5$, $p<.05$) (表 15)。女性の切り抜きは、3歳児(54.7%)が最も多く、その後は年齢と共に減少した。

表15 人間 (女性) の有無

	無 (%)	有 (%)
1 歳児	37(67.3)	18(32.7)
2 歳児	43(68.3)	20(31.7)
3 歳児	24(45.3)	29(54.7)
4 歳児	37(54.4)	31(45.6)
5 歳児	47(61.8)	29(38.2)
6 歳児	44(74.6)	15(25.4)
全体	232(62.0)	142(38.0)

人間女性の有無の性差については、有意差が認められ、全体では女児の方が男児よりも人間(女性)を貼る作品を多く作った。女児 88(47.6%) > 男児 54(28.6%)。 ($x^2=14.32$, $df=5$, $p<.01$) (表 16)。

表16 人間女性の有無 (性別)

	無 (%)	有 (%)	計
男児	135(71.4)	54(28.6)	189
女児	97(52.4)	88(47.6)	185
全体	232(62.0)	142(38.0)	374

次に人間 (女性) の有無における各年齢の性差については有意差が認められ、2, 3歳の女児は男児よりも人間女性を多く使用する。特に3歳女児は70.4%と使用が最も多かった (表 17)。

表17 人間 (女性) の出現率

		無 (%)	有 (%)	計
1 歳児	男児	18(69.2)	8(30.8)	26
	女児	19(65.5)	10(34.5)	29
2 歳児(*)	男児	21(84.0)	4(16.0)	25
	女児	22(57.9)	16(42.1)	38
3 歳児(*)	男児	16(61.5)	10(38.5)	26
	女児	8(29.6)	19(70.4)	27
4 歳児	男児	20(66.7)	10(33.3)	30
	女児	17(44.7)	21(55.3)	38
5 歳児	男児	29(67.4)	14(32.6)	43
	女児	18(54.5)	15(45.5)	33
6 歳児	男児	31(79.5)	8(20.5)	39
	女児	13(65.0)	7(35.0)	20

* $p<.05$

c-i. 動物（全体）

年齢と動物（アニメ、漫画を除く）の全身像の有無と関連性が認められた($x^2=23.05$, $df=5$, $p<.01$)。1歳児で32.7%に出現するがその後は2歳児22.2%、3歳児では最も少なく4歳児以降増加する（表18）。

表18 内容・動物（全体）の有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	37(67.3)	18(32.7)
2歳児	49(77.8)	14(22.2)
3歳児	49(92.5)	4(7.5)
4歳児	53(77.9)	15(22.1)
5歳児	50(65.8)	26(34.2)
6歳児	33(55.9)	26(44.1)
全体	271(72.5)	103(27.5)

動物全体の有無の全体の性差については有意差は認められなかった。

c-ii. 動物（部分）

動物（アニメ、漫画を除く）では、動物の身体の一部の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

d. 植物

植物の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

e. 建物

建物の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

f. 室内

室内の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。

g. 食べ物

食べ物の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。各年齢群における性差では2歳児と6歳児で有意な差がみられ2歳児では女児、6歳児では男児が食べ物を多く使用していた（表19）。

h. 乗り物

乗り物の切り抜きの有無の割合について年齢との関連性は認められなかった。全体では4割が乗り物を貼っている。各群では1歳児の50.1%が最も多く、2歳児の31.7%が最も少ない。

乗り物の有無の全体の性差については、関連性が認められた($x^2=23.84$, $df=1$, $p<.01$)（表20）。全体では男児の方が女児よりも出現率が高かった。男児(52.9%)>女児(28.1%)。

表19 食べ物の出現率

		無 (%)	有 (%)	計
1歳児	男児	6(23.1)	20(76.9)	26
	女児	6(20.7)	23(79.3)	29
2歳児(*)	男児	11(44.0)	14(56.0)	25
	女児	7(18.4)	31(81.6)	38
3歳児	男児	9(34.6)	17(65.4)	26
	女児	11(40.7)	16(59.3)	27
4歳児	男児	5(16.7)	25(83.3)	30
	女児	5(13.2)	33(86.8)	38
5歳児	男児	9(20.9)	34(79.1)	43
	女児	7(21.2)	26(78.8)	33
6歳児(*)	男児	5(12.8)	34(87.2)	39
	女児	7(35.0)	13(65.0)	20

* $p<.05$

表20 乗り物の有無（性別）

	無 (%)	有 (%)	計
男児	89(47.1)	100(52.9)	189
女児	133(71.9)	52(28.1)	185
全体	222(59.4)	152(40.6)	374

i. 物体

切り抜きの有無について年齢との関連性は認められなかった。

j. 抽象

抽象的なイメージの切り抜きの有無について年齢との関連性は認められなかった。

k. 漫画（アニメ）

漫画（アニメ）とは、テレビなどの漫画のキャラクターの切り抜きの有無を調べたものであり、年齢との関連性が認められた($x^2=43.93$, $df=5$, $p<.01$)（表21）。

表21 内容・漫画（アニメ）の有無

	無 (%)	有 (%)
1歳児	25(45.5)	30(54.5)
2歳児	33(52.4)	30(47.6)
3歳児	38(71.7)	15(28.3)
4歳児	63(92.6)	5(7.4)
5歳児	59(77.6)	17(22.4)
6歳児	43(72.9)	16(27.1)
全体	261(69.8)	113(30.2)

全体の性差については、有意差が認められた。全体では女児の方が男児よりも出現率が高かった($x^2=7.43$, d

f=1, p<.01)。女兒(36.8%)>男児(23.8%)。

4. 考 察

形式分析、内容分析からそれぞれの項目についての考察を行い、各年齢別の特徴をまとめた。

(1)形式分析

1) 切片数

性差について、杉浦(1993)の研究では差がないと報告されているが、全体では男児よりも女兒の方が切り抜き数が多かった。特に年齢別にみると3歳児で顕著な差が見られた。3歳という時期は語彙が急激に増加し、基本的な統語構造の発達と相まって会話行動が巧みになるといわれている(無藤ら, 1990)。また発達のみた性差の現われ方の研究(柏木, 1975)では、始語期や文法、読みなど言語能力面で女兒の方が優れているという報告がある。また、幼児期の女兒の言語能力が男児にまさるという指摘は他にも多くの研究(間宮, 1988)で知られており、発現の時期の早さだけでなく、反応における平均語数が多いことや文の長さや複雑さ等の点でも認められるとされる。3歳児の女兒に切片数が多く使用されたということと言語発達とは関係が深いのではないかと考えられる。

2) 余白の分量率

余白の分量は、1歳児では57.1%だが6歳児では36.0%へと減少している。杉浦の研究では幼児の余白は60%であった。今回の全年齢の平均が43.3%であったことから比較すると16.8%少ないという結果が得られた。時代の経過と共に余白の分量にも変化がみえる。本研究の結果から、余白の分量は乳幼児においても年齢と共に減少するといえる。幼児の知覚の発達において若井ら(1994)は、図形を視覚で認知する場合、3歳児では物の輪郭をとらえないのに対し、6歳児では視線で輪郭を追い全体像をとらえようとするを述べている。

余白の分量が減少する背景には、画用紙全体を把握し使用することができる知覚能力の発達との関連が深いといえる。また、画用紙という枠を意識することは、自己抑制力との関連性を考えることができる。柏木(1983)は「自己」の発達には、自己表現・自己実現面と自己抑制面という2つの力が求められると指摘した。前者は5歳頃までに急激に伸び、その後はほぼ横ばいだが、後者は3歳以降7歳まで一貫して伸び続ける。このことから、5歳前後からは枠内に自己主張をする能力が高まるといえる。このことより余白分量と自己の発達は関係があると思われる。

3) はみ出しの有無

はみ出しは、1歳から4歳までは約50%以上に出現するが、5歳児以降は約30%に減少する。杉浦(1993)の研究においても、出現率は40%であり今回の割合とほぼ同じである。また、発達とともに減少するという要因についても杉浦は、運動機能の発達や、意識的・無意識的に枠からはみ出す活動性によるものの減少であると述べている。今回の5歳児以降の減少という結果からも、依存から自立へと自我の発達に影響を受けていると考えられる。コラージュを作成する場合、画用紙は1つの枠と捉えられ、枠内で自分を表現し収めていくことができるようになるのではないかと推測できる。空井(2002)によると「はみ出し」は、与えられた画用紙という環境に対して表現したいものを構成して提示する姿勢が弱く、主観性の強さや統合性の弱さを表わすと述べられている。また、性差についてみると5.6歳に有意差が見られ男児が女兒よりも出現率が高いという結果だった。自己抑制力の面から捉えても男児の方が女兒よりも低いことから関連性が高いといえる。さらに、主観性や統合性は女兒の方が早く獲得するという示唆も示唆できる。

4) 重ね貼りの有無

全体では約75%に重ね貼りがあった。各群別でみると1歳児で85.5%、6歳児で62.7%と年齢とともに出現率は減少する。重ね貼りの有無については、切片数の項目で述べたように、幼児期の女兒の言語能力が男児にまさり、複雑な表現方法を用いることが多いという指摘との関連が考えられる。

5) はみ出しと重ね貼り

はみ出しと重ね貼りが両方ある作品は年齢との関連性が認められた。はみ出しと重ね貼りの4パターンでも関連性が認められ、はみ出し・重ね貼り両方有りは、年齢と共に減少し、逆にはみ出し・重ね貼り両方無しは、年齢と共に増加する。つまり未分化だった表現力が次第に調和のとれた全体として統合化されていくことの表われと考える。

6) 文字の有無

文字を使用している作品は全体では39.6%であり、杉浦の成人を含んだ研究と比べると出現割合は約半分であった。このことは乳幼児においては、やはりまだ言語発達が少ないことが要因であると考えられた。その中において今回の研究では全年齢では2歳児が57.1%と最も多く出現した。杉浦(1994)は、幼児にとって文字は記号的な意味で視覚的に受け取られることを述べているが、本研究においても同様のことを感じた。2歳という時期は運動能力が発達し、自立欲求がでてくる時期である。この

ような時期において文字が、視覚的に取り入れられ使用されることは言葉の発達と関係があると思われる。

7) 色彩数

色彩数は1,2歳群では最も多いのが〈中位〉47.4%、3,4歳群では〈多い〉51.6%、5,6歳群〈中位〉50.5%であった。色彩は感情表現と関連が深い。深津ら(1998)は、3歳児以降の幼児は感情豊かな生活を送ることができるようになると述べている。3歳の時期で色彩数が最も多いというのは、このような感情の発達との関連が深いととらえられる。また、この時期ピアジェ(Piaget, J)の認知発達段階では、感覚運動的段階から前操作期(preoperational period)に入り、象徴機能(symbolic function)の出現とともに、ごっこ遊びなどのイメージ遊びが可能になるとされている。今回得られた3歳前後での色彩数の増加と、このような認知発達とは関連が深いと考えられる。また、性差では女兒の方が男児よりも色彩数が多い傾向が見られ、2,4歳児においては性差の有意差がみられた。言語能力の差に加え、女兒の方が男児よりもコラージュにおいて色彩の感情表現が促進されやすいことも指摘できる。

8) 統合性の有無

作品全体としてバランスのとれていない作品は年齢と共に減少し、バランスのとれた作品が増加した。河合(1969)は、作品から受ける印象を大切に分離、粗雑、貧困、機械的、固定的な要素の少ないことを統合性と述べている。本研究では、切り抜きが貼られた場所や余白の分量、切り抜きの内容から受ける印象などを総合的に評定した。杉浦(1994)の結果からも発達と共にバランスのとれた作品が増加することがわかっており、アセスメントとして重要なカテゴリーであると述べている。本研究結果でも、同様のことがいえると思われる。ピアジェ(Piaget, J)の認知発達段階では、同化と調節によってスキーマ(scheme)が調整されていくことで外界に対応するとされ、さらに、脱中心化(decentering)により物事を多面的・総合的にとらえることができるようになるとしている。本研究で、バランス・統合力の発達的变化がみられたことは、このような認知発達によるものと捉えることができる。

9) 中心性の有無

中心性の有無に関しては年齢との関連性は認められなかった。杉浦(1994)の研究では幼児の作品に中心性が認められるのは3.6%と少なかった。

(2) 内容分析

1) テーマ性

テーマが有るとされた作品は年齢と共に増加し、テーマが無い作品は年齢と共に減少した。また年齢群でみるとテーマ有りの出現率は1歳児で23.6%、2歳児で41.3%、3歳児になると64.2%にみられ、3歳児以降いっきに6割以上がテーマのある作品をつくっている。ピアジェ(Piaget, J)の認知発達段階の象徴機能(symbolic function)の獲得の時期との関連も深いと思われる。さらに、今回の結果では2歳児で既にテーマが出現していた。このことは2歳児ではすでにイメージの存在があることを示しているといえる。

2) 内容

a. 自然の有無

自然の有無に関しては24.6%に出現し、年齢による差はなかった。今回は乳幼児が自然を貼ることの意味を捉えることができなかった。今後は自然の内容などを含めてもう少し詳しく検討すべき課題である。

b-iii. 人間(男性)

人間の男性の切り抜きと年齢との関係において関連性はみられなかった。性差については有意差が認められた。全体では男児の方が女児よりも人間(男性)の出現する作品を多く作った。年齢別にみると4歳、5歳、6歳の男児は女児よりも多く貼った。コールバーグ(Kohlberg, L., 1966)は幼児期の性役割の獲得について①性の同一性、②性別ラベルの一貫性、③性の恒常性という3つの発達段階を提示し4,5歳ごろから性役割の獲得があると述べている。本研究では、4歳児以降の男児が男性を多く貼った。この結果もコールバーグの指摘する性役割の獲得(gender role)と関連があると思われる。

b-iv. 人間(女性)

人間の女性の切り抜きと年齢の関係において関連性がみられ、最も多く貼ったのは3歳児の54.7%であるという結果が得られた。また性差では全体でも女児の方が男児よりも多く貼り、2,3歳児の女児においても男女に顕著な差がみられた。さらに3歳児女児では出現率が70.4%と最も高かった。このことは人間(男性)でも述べたように性同一性の獲得と関連が深いと思われる。今回の結果では2歳ですでに男女の差が出ており、3歳頃に獲得されるとする指摘よりも早い段階で出現した。

以上のことより(b-iii, b-iv)、幼児の性役割の発達がコラージュ作品からも読み取れることが示唆できる。

c-i. 動物(全体)の有無

動物(全体)の出現率は全体で27.5%であり年齢との関連性が認められた。3歳児では7.5%と最も少なく、6歳児で最も多い。杉浦の研究では動物の出現率は年齢と共に増加する。本研究でも4歳児以降は増加傾向がみられた。社会性の獲得とも関係があると思われるが、今後、どのような種類の動物をどのような意味合いで貼ったの

かを調べて検討することでアセスメントの要素としての指標になると考えられる。またその際、男女の差等も合わせて検討することで解釈が深まるのではないかと思われる。

g. 食べ物

食べ物の出現率は全体で76.5%と高い。年齢群でもそれぞれに6割以上出現しており、4歳児では最も多く85.3%であった。また、ロールシャッハ反応にみられる食べ物は口唇期的欲求、依存欲求を示すものとされ、乳幼児に出現が高いのはこの点と関連が深いと思われる。また雑誌掲載写真の食べ物はカラフルで美しく健康的で食欲やエネルギーの源として連想できる。2歳児と6歳児で男女間に有意差がみられ、2歳児では女児の方が男児よりも多く、6歳児では男児の方が女児よりも多く出現した。このことから、依存欲求や自立のためのエネルギーの取り入れという視点から解釈できると思われる。

h. 乗り物の有無

乗り物の出現率は全体で40.6%であり年齢との関連性は認められなかった。男女間に有意な差が認められた。年齢別にみると1,4,5歳児で有意差がみられ男児の方が女児よりも多く切り抜きを貼った。乗り物は活動性、エネルギーの表現とされる。女子より男子の活動性の強さを感じとれる。箱庭ではその方向性が重要になるがコラージュに使用する車の広告等では左向きの写真が多い。そのため方向性をアセスメントの大きな要素にすることは難しい。また、男女差が大きいことは、人間男性、人間女性の項でも述べたが性同一性の獲得との関連も深いと考える。

i. 物体の有無

物体の概念は広範囲であり、出現率は全体で88.5%と多かった。他の項目同様、物体としてどのようなものを貼ったのかを詳しく見ていくと、アセスメントの1つの指標になると考える。

j. 抽象の有無

抽象の切り抜きの出現率は8.6%と低かった。乳幼児では切り抜きの抽象的な模様を見て具体的に何かをイメージすることは少なく、出現率が低くなったのではないかと考えられる。

k. 漫画（アニメ）の有無

作成の状況を見て低年齢児に多く選択されるアニメの項目を追加して調べてみた。その結果、年齢との関係において関連性が認められた。1,2歳児では平均51.1%と高いが、3,4歳児では17.9%へと減少し、5,6歳児で24.8%と再び増加する。このことを発達と関連させて考えると1,2歳児では好奇心も旺盛になり、コントラストがはっきりしたアニメの絵が刺激となり選択したと思われる。3,4歳では日常の活動範囲が広がり外界へ気持ちが広がる時期だと思われる。その結果、アニメに興味を

示すことが減ったとも考えられる。5,6歳で再び出現率が増加するのは、集団生活の中で友だちや周囲の環境からの刺激を受けて興味を覚え出現率に反映されたと考えられる。また男女間に有意差がみられ、5歳児では女児の方が、男児よりも出現率が高い。このことから、色彩数のところと同様に言語能力の差と女児の方が男児よりもコラージュにおいて感情表現が促進されやすいことがいえる。

1. 各年齢別のコラージュの特徴

形式分析と内容分析を合わせて各年齢別の特徴をまとめてみた。

1歳児

余白は全体の57.1%あり全年齢群の中で最も多い。

はみ出しも50.9%あり、85.5%が重ね貼りをする。印象として1箇所は何枚もの切り抜きを層のように貼る作品も多い。色彩数は他の年齢群と比較して差はない。バランスがとれていない、統合性の無い作品が多い。また、テーマがある作品は23.6%と少ない。内容では、約半数に人間の部分が登場する。動物全体も全年齢で最も多く貼られる。また、女児の方に男児よりも多く出現する。乗り物が全年齢で最も多く貼られ、男児に出現率が高い。漫画（アニメ）も全年齢で最も多く貼られる。

2歳児

はみ出しは61.9%、重ね貼りは85.7%に見られた。文字の出現は2歳児が最も多く57.1%だった。2歳という時期は周囲の様々なことに興味関心をもつ時期であることからほとんど読むことができない文字を記号的な意味でとらえたと考えられた。色彩数は女児の方が男児よりも多くの色彩を使用した。また、統合性のない作品が47.6%、中心性のない作品は52.4%でありまだはっきりとしないという印象の作品が多い。テーマは41.3%にみられた。内容では、男児に比べて2.6倍の42.1%の女児が人間の女性を貼った。また食べ物に関しても同様に女児の方が多く男児の約1.5倍の81.6%に出現した。

3歳児

切片数は女児の方が男児よりも多く貼る。はみ出しは50.9%に見られ、重ね貼りも75.5%に見られる。色彩数は過半数の人が多い(9-11色)だった。バランスのとれている作品はまだ30.2%程度であり、中心性のある作品も37.7%と少ない。テーマのある作品は発達に応じて増加するが、3歳児以降飛躍的に増加し64.2%がテーマのある作品をつくる。また人間女性を多く貼ったのも3歳児(54.7%)だった。また動物では3歳児が最も少なかった。このように3歳児はコラージュ内容に変化が顕著に表われる年齢であることがわかった。そのことは3歳という時期が自我の発達や身体の成長が目覚ましい時期であり、そのことがコラージュの表現に表われているとい

うことがいえる。

4 歳児

はみ出しは過半数に出現し、重ね貼りも 70.6%に見られる。色彩数は〈多い〉、〈非常に多い〉が全体の 58.8%と 3 歳児について多い。また男女間に差が認められ女兒の方が男児よりも色彩数が多い。色彩の彩度では他の年齢群と比較すると濃い色彩の作品が最も多かった。テーマの有無では 3 歳児以降急激に増加したが 4 歳児では 69.1%の人がテーマのある作品を作る。人間男性では男女間に有意差が見られ、男児が女兒の 2.5 倍の割合で男性を多く貼る。人間女性では女兒が男児の約 1.6 倍の割合で女性を多く貼る傾向がある。食べ物 は各年齢とも出現率が高いがその中でも 4 歳児は最も高く 85.3%である。乗り物では男女間に有意差があり、男児の方が女兒よりも多く乗り物を貼る。漫画アニメは他の年齢群と比較して最も少なく 7.4%しか出現しない。

5 歳児

余白の分量は年齢と共に減少し、5 歳児では 6 歳児について 37.8%と少ない。はみ出しは 1 歳~4 歳では 50%以上にみられたが 5 歳児では 30.3%と減少する。枠内に自分を表現し収めることができるようになる。それまで多かった色彩数も〈多い〉から〈中位〉へと変化する。統合性のある作品は発達と共に増え 5 歳児では 40.8%がバランスのとれた作品である。さらに中心性の有無では他の年齢群と比較して最も中心性があつた。人間男性では 4 歳児と同様に男児が女兒より 3 倍強の割合で多く貼る。人間女性についても女兒の方が比較的多く女性の切り抜きを貼った。乗り物についても男女差が見られ男児が女兒よりも 1.8 倍多く乗り物の切り抜きを貼った。このようにみていくと 5 歳児では男女差が目立つ。このことは成長と共に性役割の獲得がなされていることの表われであると思われる。

6 歳児

余白の分量は発達とともに減少し 6 歳児では 36.0%という結果だった。はみ出し、重ね貼りについても両方とも有りの割合は発達と共に減少していく。両方の特徴を示すのは 6 歳児では 23.7%である。文字の出現率は 4 歳児以降減少し 6 歳児では 28.8%だった。テーマのある作品の割合は発達と共に増加し 71.2%の人がテーマのある作品を作る。人間の出現は 6 歳児が最も少なかった。人間の男性では 4.5 歳児と同様に男女間に有意差が見られた。女兒では人間の男性の出現はなく、男児は 23.10%出現した。人間女性については女兒の方が男児よりも人間女性を貼った。動物全体の出現は他の年齢群と比較して最も多かった (44.1%)。また食べ物については男女間に有意差があり男児に多く出現した。

5. まとめ

本研究の結果は以下のように要約できた

①コラージュの発達的な特徴をとらえることができた②重ね貼りは年齢と共に減少した③はみ出しは年齢と共に減少した④テーマがある作品は 3 歳児以降急激に増加した⑤人間の男性、女性の有無に関して 4,5,6 歳児では男児が男性を多く貼り、女兒は 2,3 歳児より女性を多く貼り性差が認められた。⑥食べものの出現率は全体で 6 割以上であった⑦乗り物の有無には男女差が顕著にあらわれた

今後の課題として性差や年齢によって変化がみられた項目をさらに詳しく研究し、発達に応じた変化をまとめることでアセスメントとしての子どもの理解へつなぐと考えている。

(本論文は、西九州大学大学院に提出した修士論文〈平成 16 年度〉の一部についてまとめたものである。)

6. 参考文献

- 1) 服部令子 1999 対人恐怖症者の表現特徴 現代のエスプリ別冊 コラージュ療法 143-152
- 2) 匹田幸余 1999 末期癌患者のコラージュ表現 現代のエスプリ別冊 コラージュ療法 153-163
- 3) 森谷寛之 杉浦京子 入江茂 山中康裕 1993 コラージュ療法入門 創元社
- 4) 森谷寛之 杉浦京子 1999 現代のエスプリ 386 コラージュ療法 至文堂
- 5) 西村喜文 2000 重症心身障害者へのコラージュ療法の試み 心理臨床学研究 18 No5 476-486
- 6) 岡田敦 1999 分裂病者のコラージュ表現について 現代のエスプリ別冊 コラージュ療法 118-131
- 7) 杉浦京子 1992 コラージュ療法の基礎的研究 I -表現特徴の発達に関するパイロット・スタディー- 一日医大基礎科学紀要第 13 号 13-38
- 8) 杉浦京子 1993 コラージュ療法の基礎的研究 II 表現特徴の発達に関するパイロット・スタディー- 一日医大基礎科学紀要第 14 号 11-34
- 9) 杉浦京子 1994 コラージュ療法 基礎的研究と実際 川島書店
- 10) 杉浦京子 2002 臨床心理学講義 朱鷺書房 杉浦京子 森谷寛之 中村勝治 川瀬公美子 山本映子 鷹村アヤ子 西村喜文 2004 全国のコラージュ療法研究会における活動報告から今後のコラージュ療法のあり方を探る 日本心理臨床学会発表要旨集 第 23 回大会 自主シンポジウム
- 11) 間宮武 1988 性差心理学 金子書房
- 12) 柏木恵子 1983 子どもの「自己」の発達 東京大

学出版会

- 13) 無藤隆 高橋恵子 田島信元編 1990 発達心理学
入門 I 乳児・幼児・児童 東京大学出版会
- 14) 平井誠也編 2003 発達心理学要論 北大路書房
- 15) 波多野完治編 1996 ピアジェの発達心理学 国土
社